

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第29号 2018年10月31日 発行

目次

- *日本の近代化における産業の育成と福澤諭吉
(塾長 長谷山彰) 2・3
- *誰が福澤諭吉を恐れるか(林正根) 4・5
- *近代ソウル都市史研究に関する研究ノート(徐延賢)… 5
- *福澤諭吉の人間観の源流を求めて
～1862 ロンドン、江戸から東京へ～(坪川達也)… 6
- *「釈宗演と近代日本」展を終えて―門下生研究が広げる
福沢・塾史研究の地平―(都倉武之) 7

- *平成30年度ワークショップ「福澤諭吉から未来を学ぶ」
および中津市アーカイブズ講座 8・9
- *2018年秋福澤記念館企画展『学問のすゝめ』のヒミツ
～郷里中津と小幡篤次郎～(西沢直子)..... 10
- *主な動き..... 11
- *センター諸記録(2018年4月～2018年9月)..... 12

100年の時を越えて 図書館旧館保存修理工事の経過報告

図書館旧館は1912年の竣工から100年を越える義塾の象徴的な建造物である。福澤研究センターは開設した1983年からこの一角に居を構えて活動してきたが、2015年8月、担当理事から所長に建物の免震レトロフィット工事を行うので仮移転の準備にとりかかってほしいとの連絡が入り、9月以降、管財部とともに移転の打合せを重ねることになった。この間、10月には理事会、11月には評議員会に工事計画が報告され、年の瀬となった12月21日に事務室を南館4階に移転、翌22日に南書庫の図書を南館7階に移動した。年明けの1月8日には北書庫や地下の分室にあった図書・資料群を東館に、12日に分室の図書・資料群を同じく東館に移動した。こうした状況からサービス面では2015年12月14日以降、改修工事終了までは研究者の閲覧を休止せざるを得なくなった。

事務室の移転先となった南館4階にはスペースの余裕がなく、急な来客や調査員の作業場所の確保に苦慮していたが、2016年6月から管財部の協力を得て同じ9階に大きめの部屋を借りることができた。これにより、例外的に認めた閲覧者の対応や、調査員の作業スペースとして日々活用している。

2016年8月には東館北側の中2階に集密書架が設置され、ここに同じ北側2階・3階にあった資料群を移し、借用中だった北側3階を管財部に返還した。2016年12月から旧館周りの樹木が伐採され、年明け2017年1月から建物は



写真① 地下からは大量の土が掘削された

フェンスで囲われた(玄関脇の福沢像は2017年1月に演説館前に仮移設)。外観の変化は見られないものの、地下では免震装置(写真②)を設置するための大規模な工事が始まった(写真①)。

2017年12月からは外壁および屋根の改修工事が始まり(写真③)、2018年8月には図書館旧館と研究室棟を長年繋いでいた渡り廊下が撤去された。免震となる旧館にはこのほか、戦後に増設された第3書庫との連結部分があり、現在、その切り離しと、新たな接合装置を取り付ける工事に入っている(写真はいずれも戸田建設からの提供)。(酒井)



写真② 免震基礎が構築され、免震装置が据付。この後、仮の支柱が撤去される。



写真③ 外壁と屋根の改修工事



日本の近代化における産業の育成と福沢諭吉

近代日本と福沢諭吉 I
平成 30 (2018) 年 7 月 9 日 (月)

慶應義塾長 長谷山 彰

2018 年は明治 150 年にあたり、慶應義塾命名 150 年の記念すべき年でもあります。1868 (慶應 4 年) は改元によって明治元年となりますが、改元前の 4 月、福沢塾は築地から芝新銭座に移転し、それを機に慶應義塾と命名されました。それ以来、慶應義塾は日本の近代化と共に歩んできたといえます。

慶應義塾の創立者である福沢諭吉の思想はどのようにして形成されたのか、また福沢の思想や行動は、社会にどのような影響を与えたのかを考えてみたいと思います。

福沢諭吉は 1835 年 1 月 10 日 (天保 5 年 12 月 12 日) に生まれ、1901 (明治 34) 年、66 才で亡くなりました。ちょうど 1868 (明治元) 年を半ばとする人生であり、『文明論の概略』緒言で、「恰も一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」と述懐しています。

福沢は若き日に大阪の緒方洪庵の適塾で学びましたが、適塾では、身分秩序の厳しい封建制下の時代にもかかわらず、全国から集まった塾生が身分の上下に拘わらず、寝食を共にし、学問に励んでいました。

もともと大阪は町人の町であり、大阪の学問も町人によって支えられ、発展してきた歴史があります。『学問のすゝめ』にある「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり」という平等思想は米国の独立宣言の影響を受けているといわれますが、さらに遡れば、青春時代に適塾の自由な気風の中で学んだ経験が福沢の思想の原型を形作ったといえます。

封建的な身分制度を打破して平等な市民社会の実現を目指した福沢の思想を表す言葉はいくつかありますが、その一つに「独立自尊」があります。明治 2 年に松山棟庵に宛てた手紙の中で、福沢は「小生敢えて云ふ、一身独立して一家独立、一家独立一国独立天下独立と。其の一身を独立せしむるは、他なし、先ず智識を開くなり」と述べています。まず個人が独立し、一家が独立し、それによって一国が独立し、天下も独立する。その根本は個人が智識を開くことにあるという主張です。

「一身独立して一国独立す」という文章は 1873 (明治 6) 年に刊行された『学問のすゝめ』第三編に載せられていますが、それより以前にすでにこの思想が福沢の中で芽生えていたことが分かります。面白いのは、「個人、一家、一国、天下」という構造が、字面だけを見ると、儒教が

唱える「修身齐家治国平天下」という詞章とよく似ていることです。個人が身を修め、家を齊えれば、国が治まり、それによって天下も平らぐという儒教の教えと福沢の発想は同じものののでしょうか。それは全く違います。

儒教の根本的発想は、王者の徳によって国を治めることを理想とし、儒教を柱とする学問を修めた士大夫層が王を支え、礼をもって交わり、民を支配する治者階級として国を安定させることにありました。厳しい身分秩序に基づく上から下への支配構造が基本となる社会です。しかし、福沢の唱えたのは、平等で自立した個人が社会の基盤を支えることで国全体が安定するという考え方でした。『学問のすゝめ』をはじめ、様々な場面で福沢が示した「一身独立して一国独立す」という考え方を敷衍すれば、日本が近代化を進めていくためには、学問を修め、職業をもって経済的に自立し、世の中の流行に惑わされずに、主体的に自分の人生、世の中の進む方向を考えることのできる人材が必要であり、そのような人材を独立自尊の人と呼ぶことができます。

独立自尊の人材を育成するために、福沢は慶應義塾を創立し、若者を育てましたが、そこでの教育内容も特色あるものでした。明治の初期に創設された官立、民間の学校が、日本の近代化にすぐに役立つ専門知識を備えた職業人の育成を目的としていたのに対して、慶應義塾は当初から、リベラルアーツ的な全人格教育を目指していたからです。

明治初期の学校をみわたすと、明治 6 (1873) 年に開設された東京大学の前身である開成学校では、法学、化学、工学、鉱山学が開設科目でした。同じ年に東京外国語学校ができ、翌明治 7 (1874) 年には東京医学校が開かれています。民間私立の学校に目を向けると、明治 13 (1880) 年には、法政大学の前身である東京法学社、明治 14 (1881) 年には明治大学の前身である明治法律学校が開校し、明治 15 (1882) 年には早稲田大学の前身で、政治法律を講じる東京専門学校が開設されました。

他方、明治 2 年の『慶應義塾之記』には、当時の義塾における日課表が載せられていますが、そこには、経済、歴史、地理、窮理、算術、文典、修身論が開講科目として挙げられています。

特に注目されるのは、経済と並んで修身論が開講されていることです。

この当時の経済学のテキストはフランシス・ウェーランドの経済書で、上野の彰義隊戦争による混乱の中で、福沢が立ち騒ぐ塾生を静めてウェーランドの経済書を講述したエピソードは有名です。

修身論のテキストは同じウェーランドのモラルサイエンスを翻訳したものでした。儒教の教典に変わる道德の書として修身論を採用したといっています。経済学と修身論との併用に加えて、『慶應義塾之記』には、「午後晩食後は、木のぼり、玉遊等『ジムナスチック』の法に従ひ種々の戯いたし、勉めて身体を運動すべし」と定めた一条がありました。こうしたことから、慶應義塾が単なる専門的職業人ではなく、幅広い教養を備え、心身のバランスのとれた人材を育成するリベラルアーツを志向していたことが窺われます。

ところで、明治以降、政府は「官」の強化による近代化をすすめ、福沢は「民」の強化による近代化をめざしました。

明治20年頃には政府の機構が次第に整い、明治23年には懸案であった憲法が施行され、国会も開設されました。行政府・立法府の体裁が整ったわけです。

しかし、産業界の創設発展はまだ不十分でした。そうした状況を見て、福沢は産業界の充実に関心をもち、力をいれようとした。1893（明治26）年の『実業論』では、「実業社会に人物少なくして、今日尚ほ未だ開国以前の旧思想を脱すること能はざるに座するものと云う可し」「学事政事の如きは既に其達する所に達して殆んど遺憾なきが如くなる其反対に、独り工商社会の実業は依然として旧時の面目を改めず」と記しています。

実業界に人物が乏しく、いまだ開国以前の旧思想を脱することができずにいるというのが福沢の見立てでした。大きな産業資本の蓄積が必要とされている時代であるにもかかわらず、いまだ商人は損得勘定で目先の利益を追い、大きな経済活動を成功させるだけの気概も倫理観もないという慨嘆から、福沢は門下生を指導して産業界に送り込む努力を続けました。早矢仕有るのは「丸善」の屋号で医薬品や洋書を扱う丸屋商社を興しましたし、そのほかにも、三井財閥中興の祖といわれる中上川彦次郎、三菱合資会社支配人として三菱財閥を創り上げた荘田平五郎、明治生命を創設した阿部泰蔵ら、多くの門下生が財界で活躍しました。

経済的な自立が人格の独立を可能にし、独立自尊の精神につながるという発想を持っていた福沢にすれば、産業界の育成はその延長上にある当然の目標であったといえます。また、門下生に宛てた手紙のなかで、福沢は近

代的な社会では商人にも道德が必要であることを頻りに説いていますが、これも慶應義塾において経済書と修身論を併用したことに通じるものです。今風に言えば、企業の営利活動は企業倫理に裏付けられている必要があるという考え方でしょう。

産業界の育成に関わる福沢の活動として代表的なものは横浜正金銀行の設立です。1880（明治13）年に開設された横浜正金銀行は我が国初の貿易為替業務を扱う銀行でした。外国銀行による為替業務独占の弊害を訴える横浜商人の声を聴いた福沢が、大蔵卿大隈重信に働きかけて実現に漕ぎ着けたもので、門下の中村道太が頭取、小泉信三の父小泉信吉を副頭取として発足しました。のちの東京銀行、現在の三菱UFJ銀行へと連なる銀行です。

江戸時代の土農工商という身分制のもとで軽視されていた商人の地位を向上させ、経済活動を活発にすることは封建制打破を標榜する福沢にとっては当然めざすべき方向であったといえるでしょう。

教育面でも、明治初年にアメリカの商業学校で使用されていた教科書（Bryant & Stratton's Common School Book-keeping）を翻訳し『帳合之法』として紹介しています。その「単式簿記編」は1873（明治6）年、その翌年には「複式簿記編」が刊行されました。現在でも使われている「貸方」、「借方」などの簿記用語はこの翻訳書がもとになっています。

1903（明治36）年、三田の寄宿舍内で、株式制度による資本金をもとにした日本現存最古の消費組合が結成され、組合員の塾生たちが、学用品、食料品販売などの活動を行いました。塾生たちが理財科でヴィッカーズの講義を聴いたことが直接のきっかけといわれていますが、遡れば、1886（明治19）年の福沢諭吉による「慶應義塾督買法」の主旨を实践したものでした。

慶應義塾は早くから「財界の慶應」と言われ、経済界で活躍する多くの卒業生を輩出してきました。日本の近代化を進めるうえで、「官」の強化を図るだけではなく、「民」の強化が必要であると考えた創立者福沢諭吉の思想が影響していたと考えられます。福沢は政界、官界とならぶ財界を創設し、経済活動を活発にすることで日本の近代化が進むことを期待しました。その出発点には、封建的な土農工商の身分制度に対する反発があり、また明治以降強まった官尊民卑の風潮に対する危惧もあったと思われます。精神的にも経済的にも自立した独立自尊の精神を持つ市民による平等な社会をめざした福沢の願いは、現在の社会においてもまだ通用すると感じます。

近年、福沢研究センターで在外研究期間を過ごされる海外の研究者の方が増えてきました。本年度も長期（1年程度）の訪問准教授1名、短期（1～2か月程度）の訪問教授1名、訪問研究員1名をすでに受け入れ、さらに1月から短期の訪問教授・准教授各1名を受け入れる予定です。喜ばしく感じるとともに、近代日本の研究機関として果たすべき役割の重さも感じます。今回は訪問研究者としていらしていた2名の先生に、ご自身の福沢論吉像やご研究についてご寄稿いただきました。（文責：西沢直子）



誰が福沢論吉を恐れるか

韓国慶熙サイバー大学教授 林 正 根

今年は明治150年である。たとえ日本人ではない、筆者のような隣国人であっても、明治維新をめぐる日本近代史の展開は、ときめきと感動を与えてくれるに充分である。明治維新に対して様々な評価があったとしても、明治維新は東洋で初めて自由と平等の民権思想を導入し、憲法に基づく近代国家を発足させた東アジア近代史の一大事件であると言わざるを得ない。

明治維新の完成と日本が未来を描いていく歴史的流れの中に、福沢論吉の足跡はくっきりと残っている。彼の存在は個人の偉大さや限界を超え、西勢東漸と帝国主義への挑戦の前で、日本中が経験した熱情と苦悩の象徴ともいえよう。そして彼の見事な業績と熱情に満ちた人生は、東アジア近代史を理解しようとする多数の日本人、韓国人、中国人に、時には近代精神の表象として、時には反面教師として、時には痛恨の歴史的な名残として多様に受け入れられている。筆者も東アジアの近代史に関心を持ち、特に日韓関係の未来に向けて、両国の市民社会の協力のため努力する者として、福沢論吉に対する複雑な感情と評価を持っていた。これはつまり、韓国人としてアジア人として、近代日本がどのような存在であったかを考える時、福沢論吉に対する疑問は必然的に持つ悩みとさけられない糸口の一つであることを意味する。福沢論吉、彼は何者か？ 日本近代史の展開は、彼の一生とどのような関係があるか？ 疑問に対するすべての答えは得られなくても、筆者は彼の足跡を直接探り、そこで小さくても、ある響きを感じられる時が来るのを待っていた。

いよいよ今年の夏、慶應義塾福沢研究センターの厚意と配慮で、彼の足跡を訪れることができるようになった。彼の私邸はもうないが、慶應義塾大学三田キャンパス全体が彼の精神の家であり、化石になった彼の肉体のように感じられた。特に福沢研究センターの西沢直子先生の案内で入った演説館で、筆者は大きな感動を受けた。素朴で落ち着いた室内からは、熱情とまじめさに満ちた力強い声が聞こえてくるようであった。ふと5月に訪問したフィラデルフィアのIndependence National Historical Parkの中にあるCarpenter's hallでの感動が思い出された。そこは平凡な大工たちと多数のアメリカ市民たちが熱論をたたかわし、歴史的な決定を導き出した場所であった。例をあげれば、独立以前にすでにペンシルベニア州では奴隷収入及びその取引を禁止する法案

を通し、独立戦争当時には物心両面で独立軍を支援した。それらはまさにその大工たちの会館から発せられたのである。私はIndependence Hallとトーマス・ジェファソンが独立宣言書を起草した建物に劣らず、この建物に宿る歴史的な意味も大きいと思う。そこには自由と独立のために自ら集まった平凡な市民と労働者たちの魂、そして熱情が息づいているからである。

慶應義塾大学の演説館でも同様の印象を受けながら、しかし万感が入り交っていた。日韓近代史がもっと望ましい方向に流れたら、この演説館は国家の境界を超える歴史的な記念碑になれたはずだからである。筆者はこの三田演説館にたたずんでいる韓国留学生俞吉濬の姿を想像しながら、時代の召命と未来の方向を探すためにこの演説館に集まった人々の息吹をたどってみた。

そして演説館を出て福沢論吉の銅像を眺め、今は小さな休憩所になっている彼の私邸跡を訪れた。学生たちが飲み物を飲んでいる。この坂道を甲申政変の主役であった金玉均も通り過ぎたのだろうか。そしてこの道を登り「福沢先生」にあったのだろうか？

韓国、中国はもちろん日本の学界からも、福沢論吉に対する批判は少なくない。その反面、彼に対する日本社会の尊敬心と信頼も、相変わらず堅固たるものに見える。論難の核心は、彼の晩年の主張と思想が日本を帝国戦争へ導き、韓国や中国をはじめ周辺国の人々に、不信と恐れを与えたということである。しかし、彼を民権主義者と賞するか、極右帝国主義者と非難するかの二者択一のみが、彼の学問とその生涯から私たちが導き出せる結論のすべてではないだろう。福沢論吉の偉大さや誤謬をもとに彼をいかに規定するかという問題を超越する、歴史的な理解と東アジア的な洞察が必要である。

筆者が考えるに、福沢論吉は強烈な帝国主義の強風に敏感に感じ、その力に一面では熱狂し、且つその反面切迫した不安を感じたようである。彼を日本中心主義、脱亜と入欧、東アジアの「悪友達」を捨てて日本だけでも帝国主義の列に入らなければならないという熱望に導いたのが、つまり帝国主義の台風であったということである。彼は、彼自身がかつて主張した自由民権と平和の道を留保し、強烈な帝国主義の磁場に引かれて、熱望と恐怖とともに抱きしめたまま歴史的な渦に巻き込まれたように思われる。そして彼の時代的な判断は、後日日本を

はじめ東アジアが全体主義と世界大戦の強烈な人力に流されてしまうことにつながった。「福翁」が第2次世界大戦を見たら、どんな話をするだろう？ 彼は厳しい国際現実と日本の安危と発展のため、留保し諦めた自由民権と国際的正義の価値を、痛く浮かべるのではなかろうか。

現在東アジアは、世界が注目する経済発展の中心地となった。福沢諭吉が手を切るしかないと思っていた「悪友達」は、日本とともに協力できる力量を備えた。今こそ福沢諭吉を召喚する時ではなかろうか。若い福沢に諦

めた夢を問い、「福翁」に彼が感じた時代的熱望と恐怖の正体を詳しく教えてほしいと要請すべき時である。

福沢諭吉の初心と東洋平和の端緒を探すために1ヵ月間訪問した慶應義塾大学を去る時、私はもはや彼に「不信と恐れ」を抱くことはなかった。私たちが彼の時代を理解し、東アジアの真の平和と繁栄のため共に努力すれば、そして彼の過誤と時代的な限界にもかかわらず、彼の苦悩の真実性をここに呼び寄せられるなら、どうして彼が恐ろしいだろう。



近代ソウル都市史研究に関する研究ノート

梨花女子大学非常勤講師 徐 姪 賢

韓国のソウル（漢陽、漢城府）は朝鮮（1392～1910）の都邑になって以来、現在に至るまで首都の機能を維持している、長い歴史性と特殊性を持つ都市である。そのためソウルは、朝鮮時代及び近現代韓国の社会と歴史を理解する重要な分析テーマになる。ソウルに関する研究は、ソウル定都600年を迎えた1994年以降関心が高まり、近年には歴史学研究方法の多様化、及び都市史（Urban History）の理解が深まったことによって、さらに研究が進み多くの成果が報告されている。現在ではソウルの変遷史研究、或いはソウルを単なる研究の材料にする水準から離れ、「都市史」の観点からソウルの様々な側面を眺望し、ソウルをより深く理解できる研究が蓄積されている。

しかしソウルの都市史研究には、まだ課題が残っている。ソウルの歴史に関する研究は、朝鮮初期（14～15世紀）、朝鮮後期（18世紀）、植民地期（20世紀）に焦点が当てられており、これまでの歴史全般にわたって詳細には研究が行われていない。ソウルは朝鮮建国後すぐに都になったため、朝鮮の建国及び漢陽都城建設に関連する朝鮮初期に研究が偏重している。また、18世紀の商業発達でソウルに大きな変化をもたらしたため、この時期にも研究者たちの関心が集まっている。さらに加えて、植民地期の日本人の居住及び市区改正と関連したソウルの変化についての研究も盛んになっている。しかしそうした一方で、朝鮮中期（16～17世紀）と開港期（19世紀）に関しては研究が不十分であり、その結果ソウルの変化の様相を前後の時代との関連性から探るには限界がある。それを超えるためには、朝鮮の時間軸をより細密に区分・拡張し、朝鮮建国以前から近現代時期に至るまでのソウルの姿を微細に考察する必要がある。

全時代にわたってソウル研究が一定の水準以上蓄積されるようになれば、ソウルの近代都市への転換過程や都市の近代性に関して、より細密な理解が可能であろう。これまで近現代韓国都市史研究においては、既に時期区分及び時代別移行問題、植民地近代化論争、植民地「残滓／遺産問題」などが論争テーマとして浮き彫りに

なってきた。例えば都市において近世と近代をいかに区別するか、植民地期中においての変化はいくつの時期区分で分けられるのか、植民地時代の変化を近代化とみるのか、植民地時代の諸機構を残滓とみるか遺産と考えるか等がその例である。これら先行研究の成果をもとに、韓国型都市化の特性を見つけ、類似した歴史経験を共有した他国都市との比較史的評価を行えば、韓国首都の特殊性が明らかになり、さらにそれは近代東アジア主要都市の性格を導き出すことに寄与できるであろう。

こうした点からみると、日本の東京都市史研究は、ソウル都市史研究に示唆するところが大きい。日本の場合、既に城下町江戸から近代都市東京への移行に関する多くの研究が行われてきた。ある研究者たちは江戸と東京を一体化した一つの歴史空間に設定した上で、単一時間単位の中で分析を行う「江戸東京学」の観点から東京を説明している。一方で他の研究者たちは、城下町江戸からの連続と継承よりも、明治維新以降の近代化過程においての江戸との断絶と変容の側面を強調している。近代都市東京は「明治維新による近代国家の首都化」、さらには「日清、日露戦争以降帝国主義への傾倒と帝都への転換」を念頭に置き、国家と権力によって変貌されたと観ているからである。このような多様な観点と深みがある東京都市史の叙述は、ソウル都市史研究に良い影響を与えている。

ソウルと東京等東アジアの主な都市は、開港期以来似かよった歴史経験と都市開発の試みを共有している。特に開港期における日本と韓国の知識人たちが、衛生や健康というキーワードを通して都市を見ていたことも、見落としてはならない共通点である。したがって、両国の都市史研究者たちの共同研究と相互交流を通して、東アジア都市研究に活気が加わることを期待する。

参考文献

ソウル歴史編纂院、第17回ソウル歴史学術大会＜ソウル歴史研究の動向と世界都市研究比較＞発表文、2018年9月7日（韓国語）



福沢諭吉の人間観の源流を求めて ～ 1862ロンドン、江戸から東京へ～

慶應義塾大学法学部専任講師 坪 川 達 也

発表者が福沢の思想に初めて触れたのは、志木高時代に配布された「福翁自伝」である。そこに「官と民とは車の両輪である」とあり、当時の橋本行草を100年先取っていると驚いた。その後、理工学部応用化学科、理工学研究科修士課程生体医工学専攻、医学研究科博士課程生理専攻を修了し、医学博士号取得後、法学部生物学教室に職を得て、現在専任講師として日吉キャンパスで文系1-2年生を対象に「生物学」(実習を含む)などを担当している。慶應義塾大学では文系学生にも実習を行わせる。これは大変ユニークなことであり、これには、福沢の建学の精神である「実学」や「窮理学」へのこだわりが関係していると知り、更に「福沢の思想」に興味を抱いた。

科学を修めた後に福沢の著作を改めて読むと、特に個体レベルでの透徹した「人間観」に驚かされた。それは発表者の専門である進化生物学や社会神経科学から導き出される人間観とも一致するものであった。そこで「福沢諭吉の人間観の負の側面と進化生物学」というタイトルで、福沢の言う「怨望」と「惑溺」について考察し、慶應義塾創立百五十周年記念 法学部論文集「慶應の教養学」(慶應義塾法学部、2008)にて発表した。また2009年より福沢研究センター主催の「近代日本と福沢諭吉」オムニバス講義の中では「自然科学と福沢の人間観」というテーマで担当させていただいている。

今回の発表では、福沢の人間観の源流を求め、その一環として、特に塾派遣留学の援助により、発表者が2014年より2年間滞在した英国での調査について話した。福沢の「西航記」「西航日記」および、Fukuzawa at LONDON (C.Blackler, The Japanese Enlightenment, Cambridge university Press, 1964) や「福沢諭吉 歴史散歩」(加藤三明、山内慶太、大沢輝嘉著、慶大出版、2012) を手掛かりに、福沢が1862年に遣欧使節団として6週間を過ごしたロンドンでの足跡を追った。さらに大英図書館が所蔵するロンドンの市内地図 STANDFORD London and suburb. MAP 1862を用いて、1862年当時の街並みを確認しつつ、2014-6年のロンドンで、その場所を取材した。

福沢は1861年(文久元年)十二月二十三日に品川を出帆した。使節団は、香港、シンガポール、スリランカを経て、鉄道でアラビアを縦断し、地中海を渡って、フランスを経ると、四月朔日にカレーを出港してドーバー海峡を渡り、鉄道にてロンドンに入って、ブルックストリートのカラーレージホテルに宿泊した。このホテルは現在でも国賓の泊まる最高級ホテルである。福沢はここを起点に、ロンドン橋線路場、キングスカレッジ病院、ウェストミンスターパレス、万国博覧会、聖メリー病院、チームズトンネル、グリニッチの天文台・海軍局、キングスカレッジ学校、養喺院、養盲院、養癲院、ロンドン Dock、テレグラーフ局、ウーリッチのアームストロング砲工場、

セントポール寺院、大英博物館などを精力的に見て回り、西洋の事物を貪欲に吸収していった。そして来るときにも通ったブリッキレーエルス・アルムス駅より鉄道にてロンドンを発ち、下流のウーリッジに泊まると、翌五月十六日テムズ川を下って、オランダを皮切りに、ロシアを含むヨーロッパ各国を回って、翌年十一月十一日品川に上陸し、帰国した。

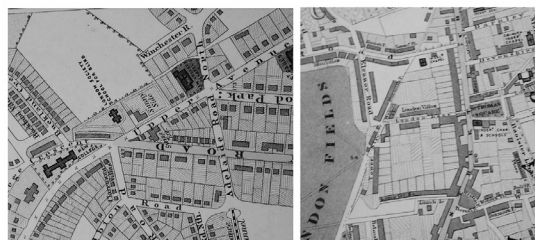


現代の Claridge's hotel

地図上では、養喺院 Independent charity school、養盲院 London society school for blind などの場所が確認できた。そして実際に歩いてみると、驚いたことに、移転した民間施設(上記2つなど)や万国博覧会会場、閉鎖された駅(ブリッキレーエルス・アルムス駅 Bricklayers arms Station)、最近再開されたロンドン Dock など以外は、基本的に往時の建物が現在でも確認できた。テレグラーフ局 Central PO などは、現在も British Telecom の基地局である。また、訪れた場所を改めて並べた時、非常に医療関係が多いことに気付いた。

私は福沢を「文転した理系」の学者であったと考えている。福沢は本格的な蘭学を、当時日本最高峰の蘭学塾であった大阪の適塾で、医師である緒方洪庵から学んだ。福沢全集には多くの医学への言及がみられるが、洋行中の訪問先にも、医学への関心が表れているのである。福沢の思想の根本には、西洋医学とそれを支える自然科学(物理学(窮理学)、化学、生物学)への理解および理系としての教育があったのだが、洋行して書物や辞書では窺い知れない西洋の社会的な事物(政治や経済)に触れ、やがて文系へと視点を移し、多数の著作を著した。そこに見られる福沢の人間観や文明観に現在でも通じる視点を与えているのは、背景にある理系的教養なのではないだろうか。

更に福沢の現代にも通じる魅力を学生や皆様に伝えるためにも、今後も調査・研究を続けていきたい。



STANDFORD London and suburb. MAP 1862 より
London Society for Blind (右) と
Independent Charity School for Deaf (左)

「釈宗演と近代日本」展を終えて — 門下生研究が広げる福沢・塾史研究の地平 —

都 倉 武 之

2018年6月4日から8月6日にかけて、特別展「釈宗演と近代日本—若き禅僧、世界を駆ける—」を開催した。会期中は、塾生、塾員、教職員などの関係者のみならず、円覚寺の関係者、その他の諸宗派の仏教関係者をはじめとして非常に多くの観覧者を得て盛況のうちに無事閉幕することができた。

今回はこれまで福沢研究センターの展覧会で毎度開催してきたギャラリートークに加えて、多数の関連行事を行った。まず平日の全日程に円覚寺から係を配置し、図録販売及び購入者限定御朱印の配布を実施。さらにアート・センター及び円覚寺の協力により、南館旧ノグチ・ルームで「坐禅ワークショップ」とミニレクチャーを合計5日間(1日2回計10回)開催した。当初は出足が鈍かったが、後半には会場をはみ出すほどの盛況であった。

もっとも大きな行事は6月11日夕方に設定した横田南嶺円覚寺派管長と馬場紀寿東大准教授による特別対談で、この日は台風襲来に重なり集客が心配されたが、800人を収容する西校舎ホールがほぼ埋まり、立ち見も出る盛況となった。当初北館ホール(収容200人)を予定していたが、問い合わせのペースが早いことから会場を変更したことが功を奏した形となった。

展覧会会場において釈宗演と親交の深かった長野県佐久市の神津家(赤壁家)のご子孫神津忠彦氏から、自宅で守られてきた貴重な宗演遺品についてご教示を得て、急遽追加出品したことは特筆しておきたい。同家は神津禎次郎とその子息神津猛が宗演と親交厚く、宗演の弟子である釈大眉を介して托されたという宗演遺品や宗演書簡等が百点以上保管されていた。展示に加えたのは、次

の5点である。①銀無垢煙管(釈宗演使用品)、②石鹼箱(ラッセル夫人から送られたもの。中にラッセルの名刺があり、箱上部にはS.S.とイニシャル)、③携帯用洋食器(スプーン・フォーク・ナイフ)、④欧米土産の西洋人形(幼児2人の陶製人形で赤ずきんがモチーフか)、⑤髑髏彫念珠と釈宗演会下の揮毫折本(髑髏1つ1つに宗演会下による揮毫文字を神津猛が彫刻)。

展覧会を機とする2つの発見についても書いておきたい。まず慶應義塾体育会空手部と円覚寺のゆかりについて。昨年の体育会125年展で、昭和4年に慶應義塾の空手部が「唐手術」を「空手道」と改称してこれが現在定着したことを紹介したのだが、実はその改称のきっかけは、当時の円覚寺派管長の古川堯道老師(釈宗演の弟子で、宗演の後の管長)と慶應の空手部員及び唐手術を初めて沖縄の外へ紹介した船越義珍の対話の結果であったということだ。船越は元々円覚寺に参禅しており、さらに部員の下川五郎が熱心に参禅していたとのこと。下川は同年の部誌『こぶし』創刊号(当センター蔵)に般若心経、宮本武蔵、無学祖元、一休禅師などを縦横に引用しながら、「空」という字への変更意義を説いている。こうして日本空手の発祥地として円覚寺境内に「空手に先手なし」という船越の言葉を刻んだ碑が建てられているのである。

もう一つは、円覚寺からご寄贈いただいた宗演の孫弟子に当たる朝比奈宗源(やはり円覚寺派管長)の講話を収めたレコードについてである。ジャケットに「禅」とともに「ZEN」と大書された宗源の講話レコードなのだが、中身は外国人向けの英訳の読み上げと思われ、「Translation by Miss Carmen Blacker」とある。カーメン・ブラッカーといえば、戦後福沢研究のために慶應義塾に留学した英国人女性学者であり、福沢の後、南方熊楠などに関心を広げられたと聞いている。果たして円覚寺とブラッカーを繋いだ縁は何だったのだろうか。

今回の展覧会は、これらを一例として慶應義塾史、そして福沢研究の意外なる広がり糸口を多数与えてくれた。福沢門下生・慶應義塾出身者といえど広大な裾野を広げており、福沢その人、あるいは慶應義塾との関係性は、人それぞれ濃淡は多様であろう。とはいえ、福沢研究センターが今後も様々なご縁を得て多様な人物に注目して展示や調査研究などの機会を持つことは、福沢その人や慶應義塾自体を相対化し、あるいは別の角度から改めて掘り下げるという効果をもたらすであろう。折しも福沢研究センターの資料を展示する施設の計画が進みつつある。釈宗演展は今後のセンターの役割の広がり可能性を示すものとなったと感じられる。



坐禅ワークショップ後の座談会の様子



宗演遺品の洋食器



宗演遺品の髑髏念珠
(後頭部に彫刻)

平成30年度 福沢研究センターワークショップ「福沢諭吉から未来を学ぶ」 および 中津市アーカイブズ講座

高校生から大学院生までが参加する福沢研究センター夏休みワークショップは今年で7回目を迎えた。本年度は8月7日から9日までの2泊3日の日程で、「福沢諭吉から未来を学ぶ」と題し、例年同様大阪・中津を巡った。

初日は誕生地記念碑や適塾など大阪の福沢諭吉に関する史跡や大阪企業家ミュージアムを探訪し、夜の読書会では『福翁自伝』をテキストとして、彼の生涯をふり返りながら、彼が未来を担う若者たちに伝えようとしたメッセージについて話し合った。本年度は昨年同様大阪に宿泊することができたので、大阪での見学時間を充分にとることができた。また、初めての試みとして、2時間弱の自由行動の時間を設け、参加者はそれぞれの関心から思い思いの見学を行った。『福翁自伝』で大きな部分を占める大阪での生活を、深く考えることができたと思う。

2日目は中津へと移動し、中津市主催のアーカイブズ講座初級の部に参加した。中津市立小幡記念図書館での開講式と講義後、福沢記念館の見学を行った。例年は記念館の見学が最終日になってしまっていたため、2日目の読書会の際に、まだ福沢が青年時代を過ごした家を見ておらず、残念であるという声があがっていた。確かに今回は旧邸と記念館を見学していたことで、2日目の読書会はより豊かなものになったと思う。その後、記念館の会議室で、古文書に関する講座を行い、記念館に近い大江匠家史料館を見学した。

3日目は、元京都造形芸術大学の教授で文化財保存修復の専門家である尾立和則先生指導のもと、襖の下張り文書の剥がし方や整理に関する講義と実習を行った。本年は参加者が少なかった分、通常2つのグループに分かれる実習を1つグループで行うことができ、尾立先生の講義を3時間受けることができた。多くの参加者が見学だけでなく、実際に襖の解体や写真撮影、スケッチ等に挑戦することができ、大変有意義な実習となった。午後は平成27年に日本遺産に登録された耶馬溪競秀峰や羅漢寺といった、福沢に関係する中津の史跡も見学した。

参加者は、高校生4名(塾高2、志木高2)、学部生2



名(文学部1、法学部1)、大学院生1名(社会学研究科)であり、引率は大塚彰(志木高)、末木孝典(塾高)、馬場国博(SFC)、井奥成彦(福沢研究セン

ター)、西沢直子(同前)の5名であった。

また8月8日から12日まで4泊5日の日程で、中津市アーカイブズ講座中級の部が行われた。例年同様、講義および福沢記念館の見学と実習で構成され、初日は初級と共通の尾立先生の講義「襖下張り文書の解体と保存」の後、針谷武志先生(別府大学)「文書整理と目録編成」および洗裕理先生(同前)「史料撮影の基礎知識」、都倉武之(福沢研究センター)「福沢を巡る“資料”―歴史研究と資料について考える―」、2日目に井奥成彦(同前)「商家・企業史料の現状と課題」の講義があった。

実習は福沢諭吉の姉、礼が嫁いだ小田部家の襖と、中津藩主奥平家の菩提寺である自性寺の屏風の下張り文書の目録作成、また新たな襖の解体や文書はがし、撮影を行った。本年度は別府大学から18名の大学生、九州大学から1名の大学院生の他、中津市民の方々も参加し、学生親睦会なども行って、交流を深めながら作業が進められた。福沢研究センターからTAとして岡部敏和、加藤学陽、川崎華菜、高野宏峰、松岡李奈が参加した。中級者向けの中津市主催アーカイブズ講座は10年目となった。

■ 参加記

僕は初めて夏のワークショップに参加させていただき、今まで考えたことのないような視点で『福沢諭吉』という人物像を学ぶ事が出来ました。自由行動では、行きたいと思っていた、福沢先生がかつて適塾の塾生であった時、川に向かって小皿を投げたとされる橋に行く事が出来ました。そこでは、『エッ?こんな高さから?』と驚きました。実際に足を運んだからこそその発見でした。読書会では、様々な人と福沢先生に関する意見をぶつけ合う事が出来、自分とは違う考え方を知り、奥深さに興奮を覚えました。福沢先生を知るという事についてより興味が湧きました。「福沢先生が中津の事を批判した」理由については、大阪で新しい学問を学んだ先生にとって、新しい情報が少ない中津は発展のない町であると感じられたためと僕は考えました。来年のワークショップが今からとても楽しみです。今回はありがとうございました。(文責:西山輝)

僕は大阪で街歩きをしたことがなかったので、自由時間に街の様子を観察できてよかった。僕たちは鍋島の浜や龍海寺等を相当駆け足で見て回ったが、夕食時に他の人の話も聞けて、次回の参考になった。中津は古い町並みが処処に残っていて面白い町だった。また、アーカイブズ講座では、襖紙を剥がす体験もしたが、和紙を作る過程でできる模様の説明が印象に残った。読書会の議論では、意見が対立した時が、内容の濃い意見が出されて

最も面白かった。2日目の議論では、大阪と中津の違いに着目した。『福翁自伝』で描かれている中津と、実際に中津での福沢先生の足跡を辿る中で感じた先生と中津の関係性には違いがあるという人が殆どだった。僕は、中津時代の福沢先生は下士の一人に過ぎなかったのに対し、大阪の福沢先生は適塾にいて中津藩から少し距離があって周囲との身分差が少なかった事が、中津を余計に窮屈に感じさせたのではないかと考えた。これは現時点の仮の答えで、その疑問を解くために、来年も参加したい。そう思える旅だった。(文責：山内慶一郎)

僕がこの旅行で一番印象に残っているのは何といってもホテルで行われた福翁自伝についての討論会です。これは、日中に廻った福沢諭吉にまつわるスポットで「何を感じ、どう思った」のかを福翁自伝のエピソードに絡めて討論しようものなのですが、ほかの塾生のレベルの高さに大変感化されました。自分も高校1年生の時に福翁自伝を熟読する機会があったので十分に語れるだろうと思っていました。しかし、いざ話してみると自分の知識の浅さに自分で失望してしまいました。この旅行を機にこれからもっと知識を深めていけたらと思います。

(文責：田原佑安)

今回このような形で福沢先生について深く知ることができたり、皆さんと意見を交換することができて、とてもいい思い出になり、行ってよかったなと思いました。一番印象に残っていることは、適塾の2階の勉強部屋の真ん中に立っている柱で、生徒たちが刀を振って傷をつけた跡が残っていると聞いた時は思わず笑ってしまいました。また襖の解体もすごく印象に残っていて、まるで宝探しをしているような気分になりました。他にも初めて見たり触れたりするものが数えきれないほどあり、どれも良い経験になりました。また機会があれば参加したいと思っています。ありがとうございました。

(文責：中嶋海一嵩)

このツアーに参加し、今まで考えることのなかった福沢の考え方などを検討することができました。私は出身高校が中津にあり、福沢諭吉に触れる機会は他の方よりも多かったと思います。しかし中津に対して福沢はあまり良い印象を持っていなかっただろうというのが、一般的認識であろうと思いますし、私もそう考えていました。しかし、このツアーの中で、福翁自伝を読むことや、旅先で先生方のお話を聞くことを通して、その認識のみでは、福沢を理解できていないのではないかと考えました。『学問のすゝめ』が、中津を思っ著述したものであること、小幡篤次郎をはじめとした、中津の人物との関係性を考えると、中津という故郷への思いはひとしおであったとも言えると思います。特に福沢が自然環境を保全した、競秀峰を生で見ることができたことは中津に対しての思いを垣間見ることができた点で印象に残っています。このツアーの中で福翁自伝中の、大阪と

中津に関する章について議論しましたが、その他の章も合わせて考えると、また新たな福沢のイメージができるのだと思います。今回は人数が例年より少



なかったようですが、先生方や高校生にも仲良くして頂いたことでこの3日間が良い思い出となりました。ありがとうございました。(文責：佐々木史哉)

私は今回のワークショップを通して多くの物を得た。一つは、勉学に対するより強い意欲だ。適塾跡で、これまで生半可な気持ちで授業を受けてきた自分にとって、昔の偉人たちがどれだけ勉強に対して真剣に向き合っていたかを肌で感じられたことはとても貴重な経験になった。当時蘭和辞書は極めて貴重で、門下生たちは奪い合うようにして使っていたという。昔の風景がそのまま残された適塾跡で、私は当時の人々と現代の恵まれた環境を比べ、自分も同じ位頑張らねばと感じた。次に、私たちは3日間かけて福沢諭吉ゆかりの地を回っていくことで、福沢に対する知見と思い入りを深めた。特に資料の現物を間近に見られた、中津の福沢記念館や旧邸の見学は感動的だった。最後に、私はワークショップを通して多くの良き友を得た。塾高、志木高生などなかなか関わる機会のない後輩から、違う学部先輩まで学年関係なくとても仲良くなることができた。元々、福沢諭吉だけに焦点を当てるというのは中々ない機会だと思って参加したが、特に今回は例年より参加者が少なかったこともあり、非常に濃密な旅となったように思う。機会があれば、是非また参加したい。(文責：中村俊哉)

私は中津、大阪を3日間訪ねて、改めて発見したことがあります。1つめは、福沢諭吉の適塾の影響の大きさです。福沢は緒方洪庵を尊敬していましたが、緒方は種痘を関西地方で先駆けて行い、本を出版するなどを行いました。適塾に福沢がいたことは、彼の時代の先導者としての側面を強化したと考えられます。2つめは、大阪という土地の影響です。大阪では、市民が自らの町を自分で作るという精神がありましたが、そのような精神が福沢の慶應義塾、そして中津市学校などの創設に息づいていると思います。3つめは、福沢の人脉力の広さです。福沢は死んだときに弔問客が1万人を超えるなど人とのつながりを大切にしました。このことは、今の社中協力などに残っているのではないのでしょうか。以上の再発見は、私が慶應で学ぶ上でこれからも大切にしていきたいなと思いました。(文責：桜間慎乃)

2018年秋福沢記念館企画展

『学問のすゝめ』のヒミツ ～ 郷里中津と小幡篤次郎 ～

西 沢 直 子

国民文化祭、そして明治150年

2018年10月6日から11月25日まで、第33回国民文化祭が開催された。折しも今年は明治150年で、大分県立先哲史料館、同歴史博物館および福沢記念館における企画展示では、福沢諭吉やその門下生たちが取り上げられ、慶應義塾が後援した。

そのなかで福沢記念館は、福沢諭吉が10代後半を過ごした旧邸に隣接して建てられ、慶應義塾からも理事・評議員が選出される公益財団法人福沢旧邸保存会が運営している。常設展示では時系列に福沢の生涯を追うと共に、中津市学校設立や耶馬溪競秀峰の保存といったテーマ別に、中津との関係や慶應義塾卒業生を中心とした中津出身者の業績が紹介されている。今回の企画展では、書店に今なお「〇〇のすゝめ」が並び、日本人なら誰もが知っているといっても過言ではない『学問のすゝめ』が、なぜ生まれたのか、なぜ同著として福沢諭吉以外の名前があるのか、実はあまり知られていないのではないのかという発想から、『学問のすゝめ』のヒミツ」と題して展示を行うことになった。

展示構成

展示は4章立てで、第1章「著者のヒミツ」では、初編に「同著」として登場する小幡篤次郎が、どのような人物であったのかが紹介された。ヨーロッパの高い文明に触れた福沢は、自らの学塾で本格的な人物育成に取り組むため、“故郷”中津に協力者を求め、その際白羽の矢が立った人物が彼であった。展示では業績がパネルで紹介され、上京時の様子を記した『福翁自伝』の草稿や、弟甚三郎と編纂した日本で最初といわれる『英文熟語集』、慶應義塾で教えたカッケンボスの『合衆国史』、福沢や小幡が第1等として登場し、慶應義塾の「社中」や「半学半教」の精神を窺うこともできる明治4年4月の『慶應義塾勤惰表』等の史料が並んだ。

第2章「誕生のヒミツ」では『学問のすゝめ』のオリジナルは何であったのか、明治初期の福沢の手紙（服部五郎兵衛宛）や著作（「中津留別之書」草稿）のほか、文言や内容が極めて似ている「県内士民え文学告諭文」写本、大蔵省への上木伺も展示された。

また宝暦年間から幕末まで長く中津藩御典医を務めた大江家から、最近発見された『学問のすゝめ』初編初版本が公開となった。同書は売れ行きが好調であったことから、すぐに脆弱であった活版から木版に変わり、残存する初版はごくわずかである（現在確認できる数は、20冊に満たない）。大江家の蔵書は状態も良く価値が高いといえる。

第3章「拡散のヒミツ」では、『学問のすゝめ』がベストセラーになった背景には、福沢の出版事業への積極的な取り組みと、著作権確立運動があったことが紹介され、緒方洪庵の遺品と伝わる硯や硯箱、その他文鎮や墨など福沢が使用していた文房具が並んだ。また福沢の手になる書物売り出し広告の下書きも展示された。

最後の第4章では「福沢諭吉の中津人脈」として、福沢と中津の人びととの交流が示された。財界で活躍した中上川彦次郎や朝吹英二についてパネルで紹介され、展示された島津万次郎に宛てた中上川の手紙（明治18年12月6日付）は、何事にも先立つものは金銭で、藩閥の力を持たない自分たちは、洋学の知識を活かして海外貿易をすべきと述べている。

また幕末維新期に中津藩を支えた上士階級が、明治以降の特に地方自治を支えた人材でもあり、彼らの多くは福沢と親交を持ち、洋学にも関心を抱いていたことが紹介された。今後彼らに関する調査は進むと思われる。常設展でもパネルで紹介されている島津復生や鈴木閑雲の他、今回は大政奉還時に京都留守居を務めていた桑名豊山の資料が展示された。

『学問のすゝめ』オリジナルを探る旅

今回私が展示をお手伝いするにあたって、考えてみたかったのは、『学問のすゝめ』の原点であった。福沢の藩に対する洋学の奨励は、すでに文久2年のロンドンからの手紙に見える。それを一般に向けて説いたものとして、最も古いものは明治3年の「中津留別之書」であろう。そこから1年余りの間に、「県内士民え文学告諭文」が出来上がる。福沢は「中津市学校之記」中の「県庁よりさとしの文」を「学問のすゝめの文」に書き換える際、わざわざ「教師の著せし」と記入している。確かに中津市学校との関係で小幡篤次郎の名前が登場したのかもしれない。しかし、明治3年から4年にかけて小幡が知

人の山口良蔵に宛てた書簡を見れば、慶應義塾のなかで議論を行っている様子や学問を「根深二植込」みたいという小幡の熱意が窺われる。小幡を名義貸しとみるのは早計かもしれない。



平成30年11月11日（日）
福沢記念館学芸員による、ギャラリートーク（展示解説）が行われました。

主な動き

■ センター公開講座

日吉キャンパスで開講している設置講座「近代日本と福沢諭吉 I」において、今年度は4名のゲストスピーカーをお招きして公開講座を開催した。講師と演題は以下のとおり。

塾員(昭19経) 神代忠男氏:「戦時下の学生生活と学徒出陣」(6月18日)

塾員(昭56政)・スポーツキャスター青島健太氏:「慶應義塾とスポーツ」(6月25日)

塾員(平3文)・韓国ソウルガーデンホテル支配人山口禮子氏:「韓国に暮らして」(7月2日)

慶應義塾長長谷山彰:「日本の近代化における産業の育成と福沢諭吉」(7月9日)

■ 国際交流

2014年から部局間の相互協力協定を締結している韓国梨花女子大学とはこれまで毎年、慶應でワークショップを開催して交流を深めてきた。今年は外部の財団から助成金を得ることができたため、引率教員2名のもと、調査員8名が8月27日から30日にかけてはじめて日本から韓国を訪問した。28日には合同で日韓近現代史をめぐるワークショップ vol.3 を開催、梨花女子大学から2名、慶應から3名の研究報告があった。このほか一行は滞在中にソウル大学にある文書館奎章閣や高麗大学の博物館などを見学した(訪問の詳細は次号に掲載予定)。



ソウル大学奎章閣



高麗大学博物館

■ 中央区民カレッジへの協力

この秋、中央区で行っている区民向けの講座に所員5名を派遣した。義塾発祥の地でもある中央区からの依頼を受けたもので、明治150年に因んだ内容となっている。今回は平成24年度に続き、センターとしては2回目の協力となる。

「福沢諭吉と明治150年」

9月26日 第1回 西沢直子 「家族とは何か」

10月3日 第2回 都倉武之 「福沢諭吉の表象(イメージ)から明治維新を考える」

10月10日 第3回 平野 隆 「福沢諭吉門下の企業家たち」

10月17日 第4回 井奥成彦 「マージナル・マン福沢諭吉～近世と近代、東洋と西洋のはざまで～」

10月24日 第5回 小川原正道 「福沢諭吉と西郷隆盛」

■ 慶應大阪シティキャンパス(KOCC)におけるセンター講座

今年度はテーマ:時事新報を読む ―「福沢イズム」の深層に迫る― をテーマに以下の5名が講義を担当することになった。

11月24日 文学部教授・センター所長井奥成彦:「時事新報創刊の経緯と背景 ―初期の社説を取り上げつつ―」

12月15日 名誉教授・センター顧問小室正紀:「『時事新報』の郵便重視論 ―明治15年郵便料金改定をめぐる―」

1月26日 四天王寺大学教授・センター客員所員曾野洋:「『時事新報』と災害復興支援 ―そのとき福沢諭吉は!?―」

2月16日 関西大学准教授柏原宏紀:「草創期時事新報の「政治家」論 ―明治初期の「政治家」について考える―」

3月16日 センター准教授都倉武之:「福沢諭吉にとっての新聞 ―時事新報社説執筆者論争や「脱亜論」批判への視座―」

■ 所員の活動

センター専任所員による講演・講義は諸記録にあるとおりであるが、以下にあげるような行事にも所員の協力を得た。

看護医療学部教授山内慶太、理工学部新任教員ガイダンスで講演:「慶應義塾の原点」(4月3日)

経済学部准教授宮内環、システムデザイン・マネジメント研究科で講義:「On the An Outline of a Theory of Civilization by Fukuzawa Yukichi」(9月23日)

■ 展覧会への協力

今年は明治150年にあたり、また、大分ではこの秋に国民文化祭が開催されたことから、関連する企画展に多くの資料を貸し出した。

10月5日～11月11日 大分県立歴史博物館 平成30年度特別展 「福沢諭吉 独立自尊へいたる道」

10月6日～11月25日 大分県立先哲史料館 国民文化祭記念・明治150年記念 「日本の近代と大分の先哲 ―時代と地域を創り出した人々―」

10月6日～11月25日 中津 福沢記念館 明治維新150年記念事業 「『学問のすゝめ』のヒミツ ～郷里中津と小幡篤次郎～」

10月6日～11月25日 大阪城天守閣 幕末維新150年特別展 「幕末・維新の人とことば」

福沢研究センター諸記録(2018年4月～2018年9月)

■ 諸会議

- *平成30年度執行委員会(4月2日、5月9日、6月12日、8月20日)
- *平成30年度第1回福沢研究センター会議(6月7日)
- *『慶應義塾150年史資料集』第3巻編集委員会(4月24日、5月17日、7月11日、8月20日、9月27日)
- *平成30年度第1回運営委員会(7月12日)
- *小泉基金運営委員会(7月25日)
- *『近代日本研究』第35巻編集委員会(8月24日、9月24日)

■ 人事

- 〈客員所員〉 新任 クナウプ、ハンス・ヨアヒム(名誉教授)
4月1日～
- 新任 戸村理(国学院大学准教授) 8月1日～
- 〈所員〉 新任 小山太輝(幼稚園教諭) 8月1日～
- 〈研究嘱託〉 新任 三科仁伸(下関市立大学) 4月1日～
- 新任 横山寛 8月1日～
- 〈訪問教授〉 林正根(韓国慶熙サイバー大学教授)
7月1日～ 7月31日
- 〈訪問研究員〉 徐姫賢(梨花女子大学非常勤講師)
7月27日～ 8月24日
- 〈事務局〉 新任 佐々木かおり(派遣職員)
4月2日～ 8月27日
- 新任 具知會(非常勤事務嘱託) 5月1日～

■ 主な来住

- *ドイツ大使館青山彌紀氏、資料寄贈・返却のため来訪(4月10日)
- *大分県立歴史博物館村上博秋氏、資料確認のため来訪(4月10～11日、5月10～11日)、資料貸出(9月10日)
- *塾員百浜尚子氏、慶應義塾大学学生帽を寄贈(4月19日)
- *南日本新聞桐原史朗氏来訪(5月8日)
- *読売新聞石原宗明氏来訪(5月9日)
- *塾員北本正晃氏、尊父北本正路氏旧蔵資料を寄贈(5月25日)
- *塾員安井裕二郎氏、『時事新報』(時事新報社史 大正15年発行)を寄贈(6月6日)
- *塾員本多孝氏、『処女作』水上瀧太郎1冊を寄贈(6月7日)
- *釈宗演展取材対応: 仏教タイムス、サンガ、中外日報(6月11日)
- *塾員本野克彦氏、敦彦氏、福沢諭吉胸像(朝倉文夫作)を寄贈(6月15日)
- *NHK、福沢諭吉・小泉信三・学徒出陣関係取材対応(6月19日、7月23日、8月2日、9月5日、13日、20日)
- *塾員山下裕康氏、昭和30年法学部法律学科卒業D組クラス会記録ほかを寄贈(6月22日)
- *大分県立先哲資料館櫻井成昭氏、資料確認のため来訪(6月25日)、資料貸出(9月18日)
- *客員所員白井堯子氏、曾祖父川合芳次郎氏旧蔵資料を寄贈(7月2日)
- *ツカモトコーポレーション資料館聚心庵館長藤堂泰脩氏来訪(7月6日)
- *塾員浅川朗氏、尊父浅川増幸氏旧蔵資料を寄贈(7月9日)
- *日本テレビ、戦没塾生塚本太郎氏関係取材対応(7月11日、25日)
- *塾員梅田耕三郎氏、資料寄贈のため来訪(7月12日)
- *港区平和展へ資料貸出(7月23日)、返却(8月20日)
- *福井県高浜町長、釈宗演展見学のため来訪(7月30日)
- *山下貞雄氏、大正期大学卒業アルバムほかを寄贈(8月1日、9月6日)
- *駐日スリランカ大使、釈宗演展見学のため来訪(8月6日)

- *中村洋子氏、尊父佐藤貞之氏旧蔵アルバムを寄贈(9月6日)
- *長野朝日放送取材対応(9月12日)
- *大阪城天守閣宮本裕次氏来訪(9月12日)、資料貸出(9月27日)

■ 出張・見学

- *都倉、京都霊山観音中野二誠会総会出席のため京都(4月21日)
- *〈文〉井奥所長、福沢旧邸保存会理事会のため中津(4月25日)
- *西沢、酒井、成蹊学園史料館を訪問(5月1日)
- *竹屋、小林、資料受取のため医学部教授南就将氏宅を訪問(5月8日)
- *西沢、酒井、資料受取のため広沢誠一氏宅を訪問(5月14日)
- *竹屋、全国大学史資料協議会東日本部会総会のため国学院大学(5月31日)
- *西沢、梨花女子大学他訪問のため韓国(5月31日～6月2日)
- *都倉、日本医史学会のため鹿児島(6月1～3日)
- *〈文〉井奥所長、西沢、中津出張(6月27～28日)
- *〈文〉井奥所長、都倉、大阪シティキャンパス10周年記念式典出席のため大阪(6月28～29日)
- *都倉、資料整理のため故田中知之氏宅を訪問(7月5日)
- *都倉、港区史調査のため善福寺(7月10日)
- *都倉、資料閲覧のため宇津木卯太郎氏を訪問(7月10日)
- *都倉、読売新聞取材対応のため小泉妙氏宅を訪問(7月24日)
- *西沢、林訪問教授、酒井、具、日本女子大学成瀬記念館、学習院史料館を訪問(7月26日)
- *都倉、上原家調査のため安曇野(8月2～3日)
- *〈文〉井奥所長、西沢、調査員、梨花女子大学とのワークショップ参加のため韓国(8月27～30日)
- *都倉、研究発表のためモーリシャス(9月8～15日)

■ 講師派遣

- *西沢、信濃町地区専任職員(新任者)オリエンテーションで講義:「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月2日)
- *都倉、信濃町研修医・専修医の新任者オリエンテーションで講義:「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月2日)
- *西沢、SDM 合宿で講義:「福沢諭吉と新しい時代」(4月7日)
- *都倉、中等部新入生特別講義:「2018年と1868年」(4月11日)
- *都倉、船橋三田会で講演:「福沢諭吉と慶應スポーツ」(4月15日)
- *都倉、福沢諭吉記念文明塾で講義:「慶應義塾史から考える「一身独立」」(5月12日)
- *西沢、すみだ女性センターすずかけ大学で講演:「ジェンダーギャップ指数で見る男女共同参画の基礎知識」(5月30日)
- *都倉、SFC 中等部道徳授業で講義:「慶應らしさと福沢諭吉」(6月14日)
- *都倉、慶應大阪シティキャンパス10周年記念式典で展示解説(6月29日)
- *都倉、SFC 慶應義塾入門で講義:「慶應義塾を通して戦争を考えるー戦時の慶應義塾と塾生をめぐってー」(7月13日)
- *都倉、慶應高校日吉協育棟完成記念行事で講演:「慶應義塾の窓から、戦争の時代について考える」(9月7日)
- *都倉、モーリシャス大学 Japan Study Week で講義:「Hidden History of Japan-Mauritius Relations」(9月13日)
- *西沢、中央区民カレッジ「福沢諭吉と明治150年」で講演:「家族とは何か」(9月26日)

■ その他

- *設置講座ガイダンス: 三田(4月4日)
- *竹越与三郎についての研究会(4月10日、7月5日)
- *都倉、酒井、美術品管理運用委員会(7月9日)
- *〈文〉井奥所長、学術資料展示施設検討委員会(7月26日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第29号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2018年10月31日 (年2回刊)

編集 慶應義塾福沢研究センター
発行

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電話 03-5427-1604

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印刷 (有) 梅沢印刷所